

国立大学入学者選抜における括り入試の状況と評価について

——ケーススタディとしての高校調査を踏まえて——

三宅 貴也（電気通信大学）

国立大学の入学者選抜において、大きな単位で学生募集を行う括り入試が徐々に増加している。歴史を遡れば、一部の大学では行われてきたが、近年導入した大学、学部を調べるとパターンが多様化している。本研究では平成 30 年度の国立大学入学者選抜における状況、及び、高校生・受験生の大学選択に影響を与える高等学校教員が括り入試をどのように評価しているかを調査し、結果を考察した。

1 問題の所在

1.1 目的

括り入試とは、入学者選抜で募集を学科ごとにおこなわず、一般的には学部など大きな単位で行う入試であり、一括入試、大括り入試とも呼ばれる。本研究では、複数学部一括、学部一括、類・系の3分類を括り入試として扱う。

複数学部一括の例は、北海道大学（文系総合入試、理系総合入試）、東京大学（理科Ⅰ類、理科Ⅱ類）、千葉大学（法政経）がある。

学部一括の例は、京都大学（文・理）、東北大学（文・経済・薬・農）、新潟大学（人文）、金沢大学（学域）、名古屋大学（文・理・農）、大阪大学（文）、神戸大学（文・農）、岡山大学（文・農）、九州大学（文・農）、熊本大学（理）等がある。

類・系の例は、東京工業大学（1類～7類）、電気通信大学（情報理工：後期）、鳥取大学（工）、岡山大学（工）等、工学系統に多くみられる。上記以外に学科（専攻・コース等を含む）募集があり、全国の国立大学の募集は大きく4分類に分かれる。

括り入試に関してはこれまで、民間の進学情報誌、調査の一部で取り上げられることはあったものの、大きなテーマではなかった。先行研究・調査において、導入状況は大学数の把握にとどまっておらず、募集人員を入試別・地域別・系統別での把握が必要である。併せて、受け入れ側である大学としても、入試改革・教育改革を行う上で近年の括り入試に対する高校の意見を集約するとともに、地域・学力別に把握するべきと考えた。

そこで、本研究では国立大学の平成 30 年度入学者選抜における括り入試の状況を募集人員で明らかにするとともに、ケーススタディではあるが、括り入試について高等学校教員がどのような評価をしているかを調査し、考察することを目的とする。

1.2 要請, 提言

2014 年 12 月の中央教育審議会高大接続特別部会の答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」においても、高等学校教育、大学入学者選抜、大学教育を「三位一体」で改革することが基本方針とされ、高校教育の在り方、課題について、教育内容の共通性を高める必要があるが、大学入学者選抜が細分化されているとなかなか難しい状況であることが指摘されている。

また、荒井克弘・東北大学名誉教授は「高校と大学の教育の円滑な接続を図るには入試改革だけでは不十分で、大学教育を理解し、専門・専攻を選択できる教育課程が必要である。米国では一般教育を受けてから専門・専攻を決めるのに対して、日本は入学者選抜で専門・専攻が決まったあと、一般教養を受けるという大きな違いがある。必要なのは、高大接続のための『教育課程』であるが、現在進められている入試改革等は単純な試験改革に留まっており、重要な視点が欠落している。」と指摘している。（日本経済新聞、2017年9月25日、朝刊8面）

1.3 先行調査, 研究

括り入試に関連する調査、論文は少なく、遡ってみても民間機関が行った全国的な調査が目立つ。

1.3.1 民間機関による調査

高等学校教員向け進学情報誌『Guideline』2010年7月・8月号（河合塾発行）においては、「大学入試の大括り化の進展とその影響」という特集が組まれている。2011年度から北海道大学が理系と文系で一括募集する「総合入試」を開始するタイミング高校教員からも注目を集めたと思われる。この特集では、

Part I が「募集の大括り化が大学入試に与える影響」、Part II が「大学生・高校教員へのアンケート調査から見た大括り化」の事例が報告されている。Part II の調査は、大学1年生 226 名、大学2・3年生 71 名（2010 年4・5月実施）とともに、高校教員 58 名にメールで調査（2010 年4月実施）を行っており、「入試の大括り化に賛成か反対か」については、賛成が 72%と多数を占めていた。

その翌年からは、朝日新聞社と河合塾教育研究開発本部では、2011 年度から共同調査「ひらく日本の大学」として、4月～7月にかけて全国の国公立大学（4年制または6年制の大学、大学院大学・通信制のみの大学は除く）を対象に実施しており、入学者選抜改革、大学教育改革、高大接続改革等の項目に関連して「括り入試」が触れられている。

2013 年度の調査「これからの大学入学者選抜の在り方」においては、「学部・学科の括り」では国立大は 56%が「大括り化の方向」が望ましいと回答した点が目を引く（公立大 29%、私立大 27%）。全体を通して「細分化の方向」が望ましいとの回答は4%と少なく、低学年での共通教育の重要性の認識や入学後のミスマッチの軽減を求めた結果ともいえよう。

2014 年度の調査「現在の大学入学者選抜における課題・今後の大学入学者選抜と高大接続」において、学部・学科の括りについては、公立大は 12%、私立大は 16%に対し、国立大は「大括り化の方向」が 51%と、設置者による方向性の違いが明確になった。

「大括り化の方向」に関して、2013 年度に比べて、公立大学、私立大学ともに大幅に低下していることが顕著であった。

2014 年度には、ベネッセ教育総合研究所が高校と大学を対象に「高大接続に関する調査」として、高校と大学それぞれが、入試改革、高大接続の現状と課題についてどう捉えているかを調査している。「入試の段階で細かく専門を分けず、大学入学後に専門を選ぶようにした方が良い」の項目に対する回答として、「とてもそう思う+まあそう思う」の割合は高校が 71.5%、大学が 57.6%であった。的確な進路選択ができない高校生が多いことを前提にした括り入試や入学後の進路変更など、大学側の支援体制に高校のほうが強い問題意識を持っていることがうかがえる。

1.3.2 研究者による論文

研究論文としては「括り入試が高校現場に与える影響」（竹内.2016）を報告している。調査期間は、2015 年8月～12月、調査対象者は西日本（地方部

の高等学校教諭（4名）、大学教員（3名）、大学生（1名）にインタビュー調査分析がされており、高校教員、大学教員に地方国立大学における括り入試導入に対する賛否とその理由を尋ねている。高等学校教諭（4名）のうち、上位進学校と推察される3高校のコメントと比較して、中堅進学校と推察される1高校の場合、「1人でも多くの生徒に国立大学合格という切符を与えたい」「受験指導によっていわゆる実力以上の大学に生徒を増やしたい」「括り入試導入は総論賛成、各論反対」に見られるように、地方部と都市部の環境（選択の幅）の違いが顕著であり、翻って好む好まざるに関わらず、「今後は括り入試が一般入試に比べ導入されないとと思われる推薦入試や AO 入試に受験者をシフトさせていく」というように高等学校の置かれた立場によっては、学校全体の進路指導方針の転換に影響を及ぼす、としている。

2 入学者選抜の状況

2.1 対象、分類

国立大学の平成 30 年度入学者選抜要項に基づき、大学院大学を除く 83 大学 94681 名（募集定員 95177 名から社会人等の定員 496 名を除く）を対象として、括り入試の状況を調査した。系統は〔人文社会科学、文系総合、理工、農水産、医歯保健、薬、理系総合、学際、教員養成、生活科学、芸術体育〕の 11 分類、地域は〔北海道、東北、東京、関東甲信越、東海北陸、近畿、中国四国、九州〕の 8 分類、入試区分は〔一般前期、一般後期、推薦、AO〕の 4 分類とした。

2.2 理系学部における導入について

国立大学理系学部で、複数学部一括、学部一括、類・系による括り入試を導入した大学を一覧にした。

表 1 理系学部括り入試の導入事例（2000 年以降）

年度	大学・学部	進学振り分け時期
2004	福島大学・共生システム理工学類	3専攻(1年次終了時)
	熊本大学・理学部(1学科)	5プログラム(2年次終了時)
2011	北海道大学・理系一括入試	8学部(1年次終了時)
	岡山大学・工学部(4系)	9コース(2年次前期終了時)
	長崎大学・工学部(1学科)	6コース(入試合格者発表時)
2014	和歌山大学・システム工学部(1学科)	10メジャー(1年次終了時)
2015	鳥取大学・工学部(4系)	14プログラム(1年次終了時)
2016	電気通信大学・情報理工学域(前期)	3類(1年次前期終了時)
	電気通信大学・情報理工学域(後期)	14プログラム(2年次前期終了時)
2017	新潟大学・理学部(1学科)	7プログラム(2年次前期終了時)
	新潟大学・工学部(1学科)	9プログラム(2年次前期終了時)
	徳島大学・理工学部(1学科)	7コース(入試合格者発表時)
2018	富山大学・工学部(1学科)	7コース(入試合格者発表時)
	金沢大学・理系後期一括入試	理工学域7学類(1年次終了時)
		医薬保健学域3学類(1年次終了時)
	広島大学・工学部(工学特別コース)	4系(1年次前期終了時)
	広島大学・工学部(4系)	11プログラム(1年次終了時)
	香川大学・創造工学部(1学科)	7コース(入試合格者発表時)
	九州工業大学・工学部(5類)	6学科(1年次終了時)
	九州工業大学・情報工学部(3類)	5学科(1年次終了時)

最近2年間でみても工学部改組に伴う括り入試が目立つが、括りの単位、進学振分けの時期は様々である。金沢大学・理系後期一括入試は、北海道大学・理系一括入試と同じく理系学部のいずれかに進学できる可能性がある。相違点としては、金沢大学の場合、後期の中で、「学類別入試」と「理系一括入試」を行っていることである。同様に広島大学工学部は前期の中で、「系別入試」と「工学特別コース(学部一括)」を行い、出願時に同じ入試区分の中で括りの単位を選ぶことができる。これまでは入試区分別で括り方が異なる場合があったが、受験生にとって選択の余地が広がることに入試前に迷いが生じる可能性もある。

また、2018年度には工学部工学科(1学科)で括り入試を行う大学(富山大学、香川大学)がみられる。いずれも出願時にコースの希望を提出させて、入試の成績と希望で合格先を決めており、入学後にも希望調査を行い、コース変更の可能性についても触れている。いずれも入学定員ではなく「受入人数の目安」で表記している。この方式は以前から長崎大学工学部が導入しており、ウェブサイトの入試情報において、コース決定に関するQ&Aを公開しており、先行事例となっている。

2.3 集計結果

入試区分別での括り入試の割合は表2の通りである。

表2 入試区分の人数・割合

入試区分	複数学部	学部一括	類・系	括り計	学科
一般・前期	4072 6.4%	9323 14.6%	5465 8.5%	18860 29.4%	45185 70.6%
一般・後期	144 1.0%	1783 12.3%	1496 10.3%	3423 23.6%	11071 76.4%
一般・計	4216 5.4%	11106 14.1%	6961 8.9%	22283 28.4%	56256 71.6%
推薦	85 0.7%	1392 11.8%	1340 11.4%	2817 24.0%	8932 76.0%
AO	107 2.7%	632 15.8%	191 4.8%	930 23.2%	3078 76.8%

一般・前期が最も高く29.4%、続いて推薦、一般・後期、AOの順であった。自身は一般・前期での導入大学が多いイメージがあり、その他の入試方式ともっと差がつくと予想していたが、平成30年度段階では募集定員における学科別募集(専攻・コース等を含む)は7割を維持していた。逆に推薦・AOにおいて、括り入試の割合が予想以上であったとも言える。内訳をみると推薦が学部一括と類・系が同じであるのに対して、AOは学部一括の割合が高く、さらに複数学部一括募集があることが特徴である。これは岡山大学(マッチングプログラム→グローバル・ディカバリ・プログラム)に依るものである。

また、一般・後期において、金沢大学が後期一括入試(文系・理系)を行っているが、類別募集を行っており、いずれのニーズにも対応できる体制となっている。

系統別では表3の通りである。括り入試の割合が高い系統としては、人文社会科学が4割を超えている。今回の集計では人文と社会科学を分けなかったが、全国的に人文で学部一括を従来から行っている大学がある一方、社会科学系は比較的少ない。その中で千葉大学法政経学部は2014年度から1学科4コース(法学、経済学、経営・会計系、政治学・政策学)の下で横断的な教育を行っている。

表3 系統別の人数・割合

系統	複数学部	学部一括	類・系	括り計	学科
人文社会科学	1308 5.8%	6571 29.0%	1618 7.1%	9497 41.9%	13168 58.1%
文系総合	157 96.9%	0 0.0%	0 0.0%	157 96.9%	5 3.1%
理工	45 0.1%	3699 10.6%	5716 16.4%	9460 27.2%	25307 72.8%
農水産	2 0.0%	1355 19.6%	245 3.5%	1602 23.1%	5319 76.9%
医療	97 1.0%	404 4.1%	573 5.8%	1074 10.8%	8869 89.2%
薬	0 0.0%	216 24.2%	0 0.0%	216 24.2%	675 75.8%
理系総合	2739 99.6%	0 0.0%	0 0.0%	2739 99.6%	10 0.4%
学際	60 2.4%	567 22.5%	0 0.0%	627 24.9%	1893 75.1%
教員養成	0 0.0%	318 2.5%	0 0.0%	318 2.5%	12575 97.5%
芸術体育	0 0.0%	0 0.0%	340 34.7%	340 34.7%	641 65.3%
生活科学	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	300 100.0%

地域別では表4の通りである。括り入試の割合が高い地域としては、北海道、東京で5割を越えており、複数学部一括は北海道大学、東京大学の影響が大きい。一方、学科別入試の割合が高いのは近畿、東北であり、8割以上を占める。関東甲信越、東海北陸、中国四国、九州は2割～3割台であるが、その中でも中国四国が学部一括の割合が高いことが特徴である。

表4 地域別の人数・割合

地域	複数学部	学部一括	類・系	括り計	学科
北海道	1112 19.8%	1292 23.0%	759 13.5%	3163 56.4%	2449 43.6%
東北	30 0.3%	1110 12.8%	435 5.0%	1575 18.2%	7083 81.8%
東京	2960 29.8%	740 7.4%	1278 12.9%	4978 50.1%	4965 49.9%
関東甲信越	0 0.0%	1156 8.6%	2097 15.7%	3253 24.3%	10142 75.7%
東海北陸	229 1.4%	1511 9.6%	1635 10.3%	3375 21.3%	12436 78.7%
近畿	0 0.0%	1806 13.9%	0 0.0%	1806 13.9%	11188 86.1%
中国四国	77 0.5%	3191 22.5%	1347 9.5%	4615 32.5%	9597 67.5%
九州	0 0.0%	2324 16.4%	941 6.6%	3265 23.0%	10902 77.0%

3 調査概要

3.1 研究手法

高等学校等の進路指導担当教諭対象の質問紙調査を実施した。そこで、各関係者が「括り入試」をどのように捉えて、進学指導を行っているかを調査した。調査方法としては 2017 年 4 月から 7 月にかけてメールで行った。

地域はなるべく全国をカバーするべきであるが、依頼対象を自身が今までに接触した高等学校の進路指導担当教諭に留まった。有効回答件数は 91 件で、地域別では、首都圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）が 66 校（72.5%）、首都圏以外が 25 校（27.5%）である。

首都圏の比重が高くなっており、今回の調査はケーススタディにとどまることは否めないと考える。

回答高校の学力レベルは、株式会社大学通信が提供する「大学合格指標」を基にした Campus Navi Perfect（キャンパス・ナビ・パーフェクト）を参考とした。本調査では、この指標が一定の学力基準であることに鑑み、この指標に基づき上記 20 段階の大学合格指標を、1～6 は「上位」、7～12 は「やや上位」、13～20 は「中位以下」の 3 段階に分類した。大学合格指標別では、上位 24 校（26.4%）、やや上位 28 校（30.8%）、中位以下（33.0%）であり、東京都は専門高校や進路多様校を一部含んでいる。

3.2 調査質問項目の詳細

質問項目は以下のような内容とした。

- ・入学者選抜における「大括り入試」（複数学部一括、学部一括、類・系の 3 分類を事例として提示）について知っていますか。（5 段階から 1 つ選択）
- ・「よく知っている、まあ知っている」と回答した場合、大括り入試を何で知りましたか。
- ・大括り入試に関する情報で重要なものは何だと思えますか。
- ・大括り入試において、あなたは、どのように学科・専攻・コース等へ配属することが望ましいと思えますか。
- ・大括り入試について、進路指導における「利点」と「課題」についてお教えてください。（自由記述）
- ・あなたの個人的意見として、大括り入試に賛成ですか、それとも反対ですか。（5 段階から 1 つ選択、理由は自由記述）

3.2.1 括り入試の認知度

括り入試を募集単位で「複数学部」、「学部一括」、「類・系」の 3 パターンでの分類を示し、入学者選抜

における認知、情報源を調査した。情報源の選択肢としては、1.3.1 河合塾調査の項目を参考とした。「よく知っている」+「まあ知っている」は全体で 65 名（73.1%）、特に「まあ知っている」は 59.6%に達した。大学進学指標別では、上位が 23 名（95.8%）、やや上位が 23 名（85.2%）、中位以下が 19 名（50.0%）であり、指標が上位であるほど、括り入試への認知度が高くなっている。

「よく知っている」+「まあ知っている」と回答した教員の情報源としては、進路情報誌が 46 名（50.5%）、大学の入学者選抜要項・募集要項が 38 名（41.8%）、大学説明会 36 名（39.6%）が上位であり、大学ウェブサイト 22 名（24.2%）、進学希望の生徒からの相談 19 名（10.9%）の順となっている。

括り入試自体の情報源に関連する質問として「括り入試に関する情報として重要なもの」を調査した。（複数回答可）

全体では、「希望の学部、学科、専攻に行くことができた割合・数」が 78 名（85.7%）、「大学 1 年次の教育や学科・専攻・コース決定のための授業やガイダンスの充実度」が 64 名（70.3%）と続いた。それに比べると、「入試難易度の変化」は 27 名（29.7%）、「大学自体のブランド力・知名度など」は 11 名（12.1%）と格差があった。

高校訪問時において、進路指導部教員と面会した際、括り入試については「希望の学部、学科、専攻に行くことができた割合・数」のみが話題になることが多い。しかし、大学側はその情報を開示するケースはほとんどなく、「大学 1 年次の教育や学科・専攻・コース決定のための授業やガイダンスの充実度」についても分かりやすく示されていないことは課題と考える。

3.2.2 括り入試における配属への意見

「括り入試」において、どのように学科・専攻・コース等に配属するか、時期を中心に調査した。

全体では「大学での成績を基に、入学後一定期間を経て配属を決定」が 79 名（91.9%）を占めた一方、「入試時の成績、希望を基に入学時に配属を決定」は 3 名（3.5%）に留まった。大学進学指標別でも同様な結果であった。近年、括り入試を導入した大学の中には、後者の方を行う大学があるが、複数学科を併願することとの差がなく、括り入試のメリット（入学後一定期間に広く学びに触れて選択）が生かされていないと考えるが、2.2 表 1 の通り、出願時にコースの希望を提出させて、入試の成績と希望で合格先を決めている大学（徳島大学、富山大学、香川大学）もあり、

合格時に受け入れるか否かを決断することになる。

3.2.3 括り入試における「利点」と「課題」

「利点」として挙げたキーワードは以下のとおりである。カッコ内は回答した学校の所在地である。

①猶予期間（先延ばし）

何がしたいか定まっていない生徒へ浪人を経験させることなく猶予期間を与えることができる。（大阪）

②適性判断，ミスマッチ減少

大学のHPなどを生徒と一緒に閲覧するが，高校生では理解が難しい。一定期間大学の講座を受講し，本人の適性を見極めた後に学科分属する方が，ミスマッチの減少につながると考える。（鳥取）

③昨今の生徒気質変化（決断できない）

昨今の生徒は細かく自分の将来を考えられないので，大括りの方が対応しやすい（東京）

④低年次での勉強意欲上昇

自分の進みたいコースに入るために，しっかりと勉強する（香川）

一方，「課題」として挙げたキーワードは以下のとおりである。

①志望先に進めない可能性（人気の偏り，特に資格系）

絶対に農学部に行きたいと考えている生徒にとっては必ずしも農学部への進学が保障されているわけではないので敬遠されがちである。（大阪）

②意思決定の先送り

今の指導方針として，分野をしっかりと研究，理解しをして決めさせるという流れがあり，大括りが増えていくと生徒の研究も先のばしで良いのではないかという考えが出てきそう。（東京）

③意欲低下

学科，専攻，コース等への配属が希望通りに行かない場合，学生の学習意欲が維持できるかどうか気がなります。（埼玉）

④大学での不十分なサポート体制

大学側が募集の段階で大括り入試の利点を強調し，入学後学生の適性や興味関心についての確かな指導をせずに学科，コース等を決めないようにすることだと思ふ。（静岡）

3.2.3 括り入試への賛成・反対

「括り入試」への賛成・反対，その理由を調査した。全体では，かなり賛成 17 名（19.3%），やや賛成 35.2%と併せて 54.5%と過半数を超えた。一方，やや反対 12 名（13.6%），かなり反対 2 名（2.3%）で合せて 14 名（15.9%）となっており，約 40 ポイン

トの差があった。

地域別でみると，首都圏では 30 名（47.6%）に対して，首都圏以外では 18 名（72.0%）と地方部の高校の方が括り入試への賛成が目立った。

今回の高校に SSH（スーパーサイエンスハイスクール）が数校含まれているが，直接訪問時の話では「早期から課題研究等に取り組むことで大学進学目的が明確になった生徒にとって，括り入試は避ける傾向がある反面，高校時代に触れる領域・分野に限界がある」と括り入試に一定の理解をされるケースもあった。

大学進学指標別では，かなり賛成+やや賛成の割合は，上位 15 名（62.5%），やや上位 17 名（60.7%）であるが，中位以下は 16 名（44.4%）に留まった。上位校は従来から東京大学，東京工業大学，京都大学，早稲田大学，慶應義塾大学等における括り入試に理解を示していることがわかった。

一方，中位以下の高校はキャリア教育を先行して行ってきた観点から考えると大括り入試は生徒のモラトリアムを促すが，方向性を決めきれない生徒には先送りも必要との意見もあった。

賛成派の意見【かなり賛成】【やや賛成】

・「私は国立大学理学系の括り入試で入学しましたが，一般的に言われている『デメリット』は学生の立場としては感じませんでした。もし希望する学部配属されなくても，それは学業を怠った自分の責任と考えるべきだと思います。（静岡）」と，自身の体験から述べている。

・「生徒の現状をみると，3年間で自分のやりたいことを見出せずにいる生徒は少なくない。ミスマッチから中途退学者も多い現状の中で，教師の立場からしても大変ありがたい制度である。（山梨）」と，進路指導の観点から中途退学予防につながる効果を期待している。

・「これは大学ごとのメッセージと考える。入学後，しっかりガイダンスをしていただき，進むべき道を指導していただければ大括りもよし。入学時から，学科別に意識して指導していただければ，学科別もよしと考える。（神奈川）」と，括り入試の有無を「大学毎の特徴」として捉えることを薦めている。

・「高等学校においては，生徒の将来の仕事や，やりたい学問を探る教育が熱心に行われているが，高等学校時に生涯設計をさせることに，批判的な教員も多く，大学などで活動しながら少しずつ決めていければいいと思っている教員もいる。私自身も，生徒の将来像を決めることに急ぎすぎているように感じる。（神奈

川) 」と、高校段階での横並びの早期進路決定システムに警告を鳴らしている。

・「学問において複眼的な視点での研究や問題解決において隣接学問研究は必須となってきたと思います。大学に入ってから、関連する基礎的な周縁学問分野もしっかりと学び、その延長として専門分野の学科に所属して専門分野の学習に進んだ方が良いと考えます。

(東京) 」と、近年の学問分野の高度化、学際化に伴う「学び方の改革」を挙げている。

・「大学入学後、専門教育を受ける前にある程度の高校の内容と大学の内容をつなぐ教養教育の期間が必要であると考えから(栃木) 」と、教養教育の再評価を期待していることがうかがえる。

反対派の意見【かなり反対】【やや反対】

・「括り入試の意義は十分理解するが、これが進められたとき、高校の現場において大学や学部学科を知るための時間や機会が減ってしまう恐れがあり、これはじりじりと高校の進路指導を後退させる可能性を秘めているように思う。また、大学側も募集の段階だけおいしいことを言って、実際入ったらたいした指導もしなかったということになれば、結局生徒は放置され、結論の先送りになってしまうから。(静岡) 」と、現状での進路指導の崩壊と入学後のサポート体制を危惧している。

・「希望する学科に配属されないことが分かったと、受験は次の年になるので2年のロスになります。系で括るくらいは全く問題ないと思います。(香川) 」と括る単位が重要である、と指摘している。

・「自分が選択して選んだ道ではない所に配属されたときに問題がある。はじめから自ら選んで失敗した時とはまた違う後悔が発生する(東京) 」と、学生自らの自発的な決断か、他者による受動的な決定かによる受け止め方の相違を挙げている。

4 考察

「括り入試への賛成・反対、理由」の結果に示されたように、学力レベルにより、上位進学校が従来から東京大学、東京工業大学、京都大学、早稲田大学、慶應義塾大学等、ブランド力のある大学における括り入試に慣れている一方、中堅校が先進的に行ってきたキャリア教育の観点から考えると確かに生徒のモラトリアムを促す側面もある。また、都市部と地方部では高校の進路指導、大学選択に格差があることも否めない。

学際化の分野も拡大しており、高校時代の限られた時間の中では、情報を精査することは難しくなってい

る。高校教員の方々が心配されるように本人が希望する学部、学科、専攻へ進めるかどうかは課題ではあるが、そもそも大学の中身をどれだけ理解しているかは判断が難しい。入学後に一定の成績を取れなかった(取らなかった)学生への施策も可能な限りあっても良いが、自由な転部・転科を拡大することは各大学・学部系統により事情が異なる。

ただ、今後も入試改革、教育改革の一端として、「括り入試」及び「入学後の幅広い学び」は推進されていくと考えられるので、大学としては、これまで以上に高大接続の観点から入学者選抜における情報をわかりやすい形で高等学校、高校生、受験生、保護者に伝えていくことが必要である。

参考文献

- 荒井克弘(2017).「高大接続に欠ける視点～専攻選べる教育課程」日本経済新聞(朝刊), 2017.9.25. 8面
- 河合塾(2010).「大学入試の大括り化の進展とその影響」『Guideline』2010年7・8月号, 2-15
- 河合塾(2013).「2013年度『ひらく 日本の大学』実施概要」『Guideline』2013年9月号, 50
- 河合塾(2014).「2014年度『ひらく 日本の大学』実施概要」『Guideline』2014年9月号, 63-66
- 進研アド(2014).「データで見る高大の意識」『Between』10-11月号(No.258), 8-9
- 竹内正興(2016).「括り入試が高校現場に与える影響ーA県の高校教員, 大学教員, 大学生に対する調査結果からの考察ー」『平成28年全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第11回)予稿集』123-128
- 中央教育審議会(2012).「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」
- <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm> (検索日:2017年11月30日)
- 長崎大学(2017).工学部ウェブサイト「工学科と入試に関するQ&A」
- http://www.eng.nagasaki-u.ac.jp/contents/07_04_01.html (検索日:2017年11月30日)
- 文部科学省(2013).「大学入学者選抜に係る動向について」
- 平成30年度入学者選抜要項(83国立大学)